

東北芸術工科大学 開学30周年記念展

ここに新しい風景を、

TOHOKU UNIVERSITY OF ART & DESIGN
30th ANNIVERSARY EXHIBITION

KOKO NI ATARASHII FUKEI WO,

2022.9.3 SAT-25 SUN 10:00-17:00

休館日：月曜日、火曜日、水曜日（ただし、祝日の9月19日は開館）

共催：東北芸術工科大学、東北芸術工科大学校友会

協力：シュウゴアーツ

会場：東北芸術工科大学 THE TOP（本館7階）、THE WALL（本館1階）

出品作家：アメフラシ、飯泉祐樹、F/style、かんのさゆり、近藤亜樹、近藤七彩、多田さやか、東北画は可能か？、西澤諭志

キュレーター：小金沢智（東北芸術工科大学）

アートディレクター：小坂橋基希（akaoni）



TOHOKU UNIVERSITY
OF ART & DESIGN

「この敷地は全部畑と田んぼだった」——東北芸術工科大学元理事長の徳山詳直(1930-2014)は、著書『藝術立国』(幻冬舎、2012年)で、現在本学が建つこの場所(山形県山形市上桜田)についてそう述べています。

2022年4月に30周年を迎えた本学の歴史を振り返ると、開学の1992年4月の段階では、校舎は本館、図書館、学生会館が建つのみでした。その後、同年9月には芸術学部・デザイン工学部の実習棟と体育館、1995年5月には新実習棟、1996年3月には大学院棟(現：デザイン工学実習棟C)、1996年10月には石彫棟が竣工し、次第に大学としての設備が整ってきます。もともと、「畑と田んぼ」だった土地の風景が、大学をきっかけに「新しい風景」に移り変わっていったのです。

さて、徳山は、山形に大学を設立することの意義についてこのように述べています。すなわち、「現代文明の反省の上に立った大学とはなにか、新しい世紀に向けて、もはやいかんともしがたいところまできた人類の文明を、新しい世代のなかでどう活かすか。(中略)これは大学の第一義的使命だと思っております」(「東北芸術工科大学生い立ちの記」と。ここでの「新しい世紀」「新しい世代」を、本学設立の1990年代=20世紀から見た21世紀にとどまらず、さらに先の未来へと向けられたメッセージと解釈・想像することができないでしょうか。芸術・デザインの大学を設立するということ、そして、芸術・デザインを学ぶということは、そのような長期的時間と視野が必要なのだ、と。

開学30周年を記念して、本学が校友会との共催で開催する本展「ここに新しい風景を、」は、本学30年の歴史を年譜・言葉・映像等で振り返るとともに、この「新しい風景」で学び、巣立った卒業生8組とひとつのプロジェクトによる展示を行うことで、これからの未来を展望する機会として二部構成で開催するものです。1992年4月の開学以来、本学は、13,000人近い卒業生を送り出してきました。30年前、山形県にとって「新しい風景」であったこの大学で学んだ卒業生は、卒業後はそれぞれの生活する場所で、自らの「新しい風景」を作り出しているのではないのでしょうか。タイトルに付けた読点には、この土地に抱かれ、この地域の人々によって育まれた東北芸術工科大学という「新しい風景」から、さらに新しいもの・ことが生まれていく、派生していくイメージを込めています。

もっとも、ある土地が「新しい風景」へと変化するのは、人為的開発だけが理由ではありません。2011年3月11日の東日本大震災と福島第一原子力発電所事故は、自然災害と人為によって、風景が思いがけない形で一変してしまう可能性があることを、その脅威をもって私たちに知らしめました。あるいは、昨今のパンデミックも、私たちの日常風景を著しく変化さ

せてやみません。

本展が、時代が大きく変動しているこの時代に、私たちの生きるそれぞれの土地——風景を見つめる機会にもなれば幸いです。皆さまのご来場をお待ちしています。(小金沢智)

展示 その1

東北芸術工科大学 開学30年の歴史

THE WALL（本館1階）

【年譜制作】東北芸術工科大学 企画調査室(野村真司、遠藤牧人)

【元・現教職員・関係者の言葉】青山ひろゆき、安達大悟、栗野武文、石川忠司、石沢恵理、和泉正哲、市川昭男、岩井天志、上原勲、牛木力、榎本倫、大森弘之、尾形良道、柿田喜則、片岡英彦、加藤真人、金子朋樹、亀山博之、木原正徳、黄ロビン、小金沢智、古藤浩、小林懐理子、小林敬一、小林隆幸、小松真土、今野仁博、酒井聡、坂井直樹、坂元徹、佐々木淑美、佐々木理一、佐藤充、佐藤涼子、末永敏明、須貝太郎、杉山恵助、瀬戸けいた、玉井建也、檀上祐樹、土田翔、土屋香奈、飛田正浩、トミヤマユキコ、中右恵理子、長沢明、中村桂子、中山ダイスケ、野上勇人、馬場雄二、番場三雄、蜂谷哲平、原高史、日野一郎、平野有花、藤田謙、藤田寿人、深井聡一郎、細川貴司、堀内芳明、牧野秀紀、松田俊介、松村茂、松本由衣、三瀬夏之介、三田育雄、緑川岳志、峯田義郎、室井公美子、望月孝、森秀達、森本諒子、柳川郁生、山縣弘忠、山田修市、山本桂輔、矢部寛明、結城泰介、柚木泰彦、吉賀伸、吉田朗、若月公平、渡部桂、渡部加菜実、渡邊吉太(84名、五十音順、敬称略)、編集：akaoni

【徳山詳直の言葉】出典：「大学設立の宣言」(1992年春)、「二十一世紀に向けて 東北芸術工科大学の誓い」(2000年5月)、『藝術立国』(幻冬舎、2012年)

【インタビュー映像】出演：元教員／小沢明、上條喬久、長澤忠徳、峯田義郎、現・元職員／畠中美栄子、原田奈緒美、卒業生／片岡杏子、後藤健一郎、インタビュアー：小金沢智、渡部桂、撮影：阿部健、根岸功、編集：根岸功

【卒業生写真・言葉】写真提供：東北芸術工科大学校友会、編集：akaoni

ここに新しい風景を、

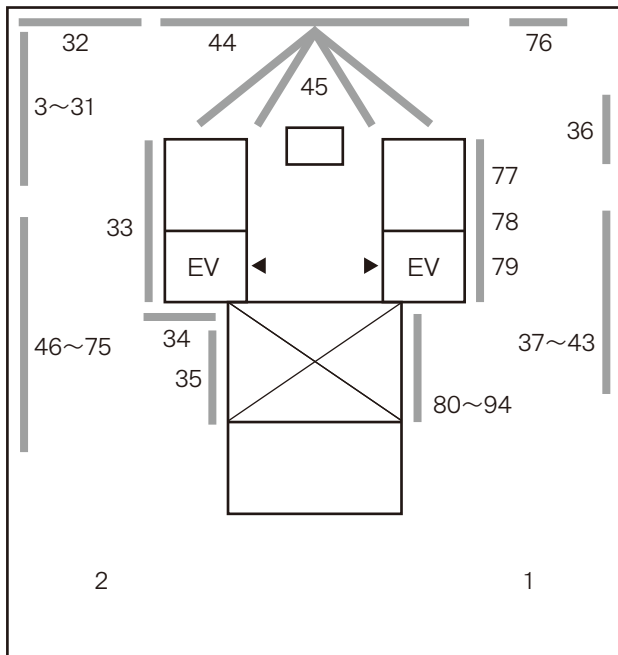
TOHOKU UNIVERSITY OF ART & DESIGN
30th ANNIVERSARY EXHIBITION

KOKO NI ATARASHII FUKEI WO,

展示 その2

卒業生8組と ひとつのプロジェクトの展覧会

THE TOP (本館7階)



ぜひ、No.44・45から時計回りでご鑑賞ください

アメフラシ

- 1 切り取る/Cut out
2022年 廃材 3075×6230×7880mm

飯泉祐樹

- 2 木石を刻むことはできず、ただ夢を塑す
2018-2022年 樟、桂、檜、その他各種木材 サイズ可変

F/style

- 3 ホールガーメントのリブ編みウールニット/丸首
2014年 (有)佐藤ニット
- 4 ゴムが入っていないさらりとした綿の靴下
2005年 (株)本寅工業+三仏生繊維(株)
- 5 亀田縞のワイドパンツ
2007年 立川織物
- 6 亀田縞の弁当包み
2007年 立川織物
- 7 亀田縞のハンカチ
2007年 立川織物
- 8 亀田縞のスリッパ
2009年 立川織物

- 9 スティンプルーフのスリッパ
2010年 (株)本寅工業+港屋(株)+(有)タカナシスリッパ
- 10 スティンプルーフ バケット
2010年 (株)本寅工業+港屋(株)
- 11 ONE/スティンプルーフのトレイ
2018年 (株)本寅工業+港屋(株)+曾田耕
- 12 花鉢
2010年 (株)坂源
- 13 スーピマ綿の湯たんぼカバー(金属製湯たんぼ入り)
2007年 (株)本寅工業+(有)白倉ニット
- 14 スーピマ綿のブランケット
2008年 (株)本寅工業+(有)白倉ニット
- 15 竹のサークルハンガー
2019年 成田文香
- 16 竹のバスケット
2020年 阿部晋哉
- 17 曲げわっぱ弁当箱
2020年 木工房きの
- 18 まな板
2022年 木工房きの
- 19 銅の片口
2013年 (有)インダ器物
- 20 銅の両手鍋
2011年 (有)インダ器物
- 21 銅鍋の蓋
2020年 (有)インダ器物
- 22 雑木のコップ
2011年 工房るの小屋
- 23 い草飾り
2015年 (有)鏡畳店
- 24 ONE/イノシシ革のバッグ
2018年 曾田耕
- 25 シナの縄の巾着バッグS(持ち手:三つ編み)
2005年 シナ機保存会
- 26 シナの縄の鍋敷き
2005年 シナ機保存会
- 27 シナの縄の花かご
2005年 シナ機保存会
- 28 亀田縞のおしぼりとシナの鬼皮のトレー
2009年 シナ機保存会
- 29 terra/テラ
2017年 穂積繊維工業(株)
- 30 HOUSE/ハウス
2001年 穂積繊維工業(株)
- 31 RONDO/ロンド
2007年 穂積繊維工業(株)
- 32 F/style productsの風景
2001年~2022年 インクジェットプリント 297×210mm 39点

かんのさゆり

- 33 New Standard Landscape
2016~2021年 インクジェットプリント
297×420mm(プリントサイズ) 27点
撮影地:宮城県仙台市泉区、宮城県仙台市若林区、宮城県石巻市、福島県双葉郡富岡町
- 34 New Standard Landscape
2021年 インクジェットプリント
420×594mm(プリントサイズ) 2点 撮影地:宮城県仙台市泉区
- 35 New Standard Landscape
2021年 インクジェットプリント
420×594mm(プリントサイズ) 4点 撮影地:福島県双葉郡富岡町

近藤亜樹

- 36 ただいま山形
2021年 Acrylic on canvas 130.3x162cm

近藤七彩

- 37 無用建具#1 2022年 建具、風鎮、鉄
- 38 無用建具#2 2022年 建具、風鎮、鉄
- 39 無用建具改#1 2022年 建具、風鎮、鉄
- 40 さかさ象茶筆筒 2022年 茶筆筒、象、鉄、エナメル塗料
- 41 こけし〇こけし 2022年 こけし、風鎮、鉄
- 42 積層燭台 2021年 真鍮製仏具、はんだ
- 43 熊〇牛 2022年 木彫りの熊、風鎮、木彫りの水牛

多田さやか

- 44 Shambhala 2015年 パネルに和紙、アクリル、岩絵具、箔 2,273 × 10,920mm
- 45 Wandervogel 2022年 和紙にアクリル、鉛筆、麻紐 サイズ可変

東北画は可能か？

- 46 藤原泰佑／幻想の杜 上段左から1番目 2009～2011年(東日本大震災前)の間 456×606mm
- 47 久保木桂子／海へ 上段左から2番目 2009～2011年(東日本大震災前)の間 456×606mm
- 48 あるがあく／緑のカーテン 上段左から3番目 2009～2011年(東日本大震災前)の間 456×606mm
- 49 相馬祐子／回帰 上段左から4番目 2009～2011年(東日本大震災前)の間 456×606mm
- 50 高橋洋一／ここにいるよ 上段左から5番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 500×606mm
- 51 番場三雄／羽黒の塔 上段左から6番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 456×606mm
- 52 大野菜々子／今昔 上段左から7番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 500×606mm
- 53 山内文貴／六郷堀の水面 上段左から8番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 456×606mm
- 54 渡辺綾／今ここにいる 上段左から9番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 456×606mm
- 55 小澤紀美／俄雪 上段左から10番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 456×606mm
- 56 松田実樹／累々 中段左から1番目 2009～2011年(東日本大震災前)の間 606×456mm
- 57 金子拓／昔話(河岸) 中段左から2番目 2009～2011年(東日本大震災前)の間 606×456mm
- 58 青木みのり／March 中段左から3番目 2009～2011年(東日本大震災前)の間 606×456mm
- 59 落合里香／しらっばすい 中段左から4番目 2009～2011年(東日本大震災前)の間 606×456mm
- 60 多田由美子／空間想起(森を拾う) 中段左から5番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 606×456mm
- 61 長沢明／オオカミアメ 中段左から6番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 606×456mm
- 62 山田正一郎／前景 中段左から7番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 606×456mm
- 63 齋藤正和／ELEMENTS-残景- 中段左から8番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 606×456mm
- 64 近江谷沙里／朝 中段左から9番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 606×456mm

- 65 百姓一揆／代謝(剥がれることば) 中段左から10番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 606×456mm
- 66 高橋光平／イルミネーション 下段左から1番目 2009～2011年(東日本大震災前)の間 456×606mm
- 67 加藤琴美／干し大根 下段左から2番目 2009～2011年(東日本大震災前)の間 456×606mm
- 68 森谷いづみ／さんかくしかく 下段左から3番目 2009～2011年(東日本大震災前)の間 456×606mm
- 69 鴻崎正武／鴻草 下段左から4番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 456×606mm
- 70 石原葉／ホウジョウノウミ 下段左から5番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 456×606mm
- 71 三瀬夏之介／遠野考 下段左から6番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 456×606mm
- 72 武田卓／朝の清水沼公園 下段左から7番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 456×606mm
- 73 森岡紗也／邂逅 下段左から8番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 456×606mm
- 74 山崎泰佑／山のなか 下段左から9番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 456×606mm
- 75 描き人知らず／不詳 下段左から10番目 2011(東日本大震災後)～2021年(東日本大震災後)の間 456×606mm

西澤諭志

- 76 ウポボイ(民族共生象徴空間)／北海道百年記念塔 2020年 インクジェットプリント 5500mm×1100mm(プリントサイズ)
- 77 東日本大震災・原子力災害伝承館／東京オリンピック・パラリンピック選手村 2021年 インクジェットプリント 600mm×1200mm(プリントサイズ)
- 78 福島県双葉郡富岡町 2018年 インクジェットプリント 5500mm×1100mm(プリントサイズ)
- 79 福島県双葉郡双葉町／東京都港区 高輪ゲートウェイ駅 2021年 インクジェットプリント 5500mm×1100mm(プリントサイズ)
- 80～94 絶景 2007～2010年 インクジェットプリント 610mm×506mm(プリントサイズ)
- 80 研究棟サロンラック 上段左から1番目
- 81 研究棟通路 上段左から2番目
- 82 図書館2階 上段左から3番目
- 83 CG室色見本 上段左から4番目
- 84 学食ソファ 上段左から5番目
- 85 本館2階教室 中段左から1番目
- 86 本館ラウンジ床 中段左から2番目
- 87 本館場所不明 中段左から3番目
- 88 本館エレベーター前 中段左から4番目
- 89 暗室 中段左から5番目
- 90 本館エントランスブラインド 下段左から1番目
- 91 本館5階地図 下段左から2番目
- 92 本館1階廊下 下段左から3番目
- 93 CG室ロッカー 下段左から4番目
- 94 本館共通演習室 下段左から5番目

*いずれも、作家・関係者から提供された情報に基づき、作品名／品名、制作年、技法・素材／工場名・制作者名、サイズ(縦×横×奥行)mmを記載した。*所蔵はすべて個人蔵である(東北画は可能か？は、東北画は、可能か？所蔵)。*展覧会場及び作品の写真撮影可能。ただし、鑑賞の妨げにならないよう、動画撮影、三脚・自撮り棒・フラッシュの使用はご遠慮ください。

アメフラシ

あめふらし／2015年に結成し山形県長井市を拠点に活動。美術家、画家、文筆家、デザイナーの4人でアート・デザインを通じた地域との関わり方を模索。2016年より廃工場の活用プロジェクトを開始し、自分たちの拠点でありスペースの在り方が変化していく市民アトリエ「Kosyau」を運営。長井市の伝統祭事で使われる草鞋の供給不足を受けて、草鞋作りの継承・普及プロジェクトを2017年より継続。「金井神幕」の継承をメインとしたプロジェクト〈アーティストの冬仕事〉はアーティストが伝統産業継承のプラットフォームとして機能できるかの試み。失われゆくものを復活させようとする事で生じる矛盾とも向き合いながら作品を展開している。

飯泉祐樹

いづみ ゆうき／1988年、茨城県ひたちなか市生まれ。2016年、東北芸術工科大学大学院芸術文化専攻修士課程修了。「時間」と「夢」について、形と構成を用いて立体表現を試みている。

F/style

エフスタイル／五十嵐恵美1978年、星野若菜1979年、新潟県生まれ。東北芸術工科大学・プロダクトデザイン科を卒業した2001年の春、新潟市内に「エフスタイル」を開設。近隣の地場産業と手を組み、企画から流通までを一貫して行う。主な商品に、山形・月山緞通のマットや、新潟の伝統工芸品シナ織りのバック、ゴムが入っていない靴下、亀田縞、銅製品等。全国各地でF/style展を巡回。著書に『エフスタイルの仕事』（アノニマススタジオ）対談収録「サヨナラ、民芸。こんにちは、民藝。」（里文出版）<http://www.fstyle-web.net/>

かんのさゆり

かんのさゆり／写真家。宮城県生まれ。東北芸術工科大学情報デザイン学科映像コース（現・映像学科）卒業。2000年代初頭の大学在学中からデジタルカメラを使用し作品制作を行う。近作では自身の暮らす地方の住宅地を中心に暫定的で仮設的な風景を主なテーマとし撮影を続ける。2001年から継続的に写真をアップしているサイトがある。（白い密集 <http://sayurikanno.com>）主な展示に、個展 2021年若手アーティスト支援プログラム Voyage「風景の練習 Practicing Landscape」塩竈市杉村惇美術館（宮城）、グループ展 2015年「写真の使用法 新たな批評性へ向け」東京工芸大学中野キャンパス 3号館ギャラリー（東京）など。

近藤亜樹

こんどう あき／アーティスト／1987年北海道生まれ、山形在住。2012年東北芸術工科大学大学院実験芸術学科修了。主な個展に2021年「星、光る」山形美術館（山形）、「ここにあるしあわせ」シュウゴアーツ/フィリップス東京/現代芸術振興財団（東京）、2015年「HIKARI」シュウゴアーツ（東京）。主なグループ展に2022年「国際芸術祭あいち2022」愛知県一宮市（一宮）、2018年「絵画の現在」府中市美術館（東京）、2012年「PHANTOMS OF ASIA: Contemporary Awakens the Past」Asian Art Museum（サンフランシスコ、アメリカ）、他多数。

近藤七彩

こんどう ななせ／工芸美術家。1997年、岩手県盛岡市出身。2022年、東北芸術工科大学大学院芸術文化専攻工芸領域修了。アートアワードトーキョー丸の内2020／2022選抜。2020年フランス大使館賞受賞。Kaika tokyo award2022秋元雄史賞受賞。g o for kogei2022に参加中。モノと記憶の再解釈をテーマに家具型の作品を制作し、美術・工芸分野への発表を行う。

多田さやか

ただ さやか／絵描き。山形県出身、東京都在住。2015年、東北芸術工科大学大学院芸術文化専攻日本画領域修了。また同年より1年間、東京芸術大学大学院美術研究科絵画専攻油画技法・材料研究室にて研究生として学ぶ。「VOCA2020」（上野の森美術館、2020年）、「META」（神奈川県民ホールギャラリー、2021年）、「たえて日本画のなかりせば：東京都美術館篇」（東京都美術館、2022年）出品。近年の主な個展として、「YOU」（ゆう画廊、2020年）、「Let's Get Lost」（亀戸アートセンター、2021年）を開催。「理想郷」を描いている。

東北画は可能か？

とうほくがはかのうか？／2009年11月、東北芸術工科大学にて日本画コースの三瀬夏之介と洋画コースの鴻崎正武により、学生と共に東北における美術の可能性を考えるチュートリアル活動として「東北画は可能か？」はスタートした。「いま」「ここ」、そして「わたし」が交わる結末点に各々の「東北画」が生まれると設定し、地域や歴史の勉強会にフィールドワーク、アートプロジェクトへの参加、共同制作などを行ってきた。主な展覧会に「平成美術：うたかたと瓦礫（デブリ）1989-2019」展（京都市京セラ美術館、2021年）。2022年7月美術出版社より初の画集が出版。

西澤諭志

にしざわ さとし／写真家・映像作家。身の周りにあるものをカメラで記録することによって、それらを取りまく社会的、経済的要因へも目を向ける制作活動を行う。主な個展に「クリテリウム98 西澤諭志」（水戸芸術館 現代美術ギャラリー第9室）、「Parrhesia #013 西澤諭志 [普通] ふれあい・復興・発揚」（2018年、TAPギャラリー、東京）、「ドキュメンタリーのハードコア」（2011年、SANAGI FINE ARTS、東京）など。ジャンルの境界を越え国内外の映像作品を紹介する「Experimental film culture in Japan」にも携わる。

キュレーター 小金沢智

こがねざわ さとし／東北芸術工科大学芸術学部美術科日本画コース専任講師、キュレーター。世田谷美術館、太田市美術館・図書館の学芸員を経て2020年4月より現職。1982年、群馬県前橋市生まれ。2008年、明治学院大学大学院文学研究科芸術学専攻博士前期課程修了。「現在」の表現をベースに据えながら、ジャンルや歴史を横断するキュレーションを得意とする。近年の主な仕事に、「都美セレクション グループ展 2022 たえて日本画のなかりせば：東京都美術館篇」（2022、東京都美術館）キュレーション、開館3周年記念展「HOME/TOWN」（太田市美術館・図書館、2021）ディレクションなど。

アートディレクター 小坂橋基希

こいたばし もとき／アートディレクター・デザイナー／株式会社アカオニ代表。1975年群馬県生まれ。東北芸術工科大学情報デザイン学科映像コース（現・映像学科）卒業。大学入学とともに山形に移住。東北の「自然・暮らし・遊び・食べ物」に魅せられ卒業後も山形に定住し、2004年にアカオニを立上げる。以来、グラフィックデザインからWeb、写真、コピーワークなどのクリエイティブを駆使するデザインチームとなり、全国津々浦々に点在するクライアントの様々な要望に応えている。現在も山形市にて「アカるく すなオニ」営業中。

東北芸術工科大学 開学30周年記念展
「ここに新しい風景を、」ハンドアウト
発行日：2022年9月3日
発行：東北芸術工科大学、東北芸術工科大学校友会
編集：小金沢智（東北芸術工科大学）
デザイン：小坂橋基希（akaoni）

東北芸術工科大学 開学30周年記念展 「ここに新しい風景を、」のための見取り図

小金沢智(本展キュレーター、
東北芸術工科大学芸術学部美術科日本画コース専任講師)

はじめに
『広辞苑』を紐解くと「風景」の項目は以下のように説明されている。

①けしき。風光 ②その場の情景。「入学式ー」③風姿。風采。人の様子。(新村出・編『広辞苑』第七版、2019年5月、岩波書店)

では「けしき」とは何か…と辞典を繰っていくと際限がないのだが、ここではひとまず、「風景」がある場所の「けしき」——「ありさま」だけではなく、人の様子までも含むということを確認しておきたい。さて、写真家・かんのさゆりは、本展のためのステイトメント(展覧会場未揭示)で、風景と故郷を紐づけるようにしてこのように書いている。

故郷をかたちづくるのは
地形か 記憶か そこに暮らす人々だろうか
大きく揺れたあの日から かたちを変えた場所があり
二度と戻れない場所がある
変わらない風景 変わりゆく風景
それが良いとか悪いとか
計ることはできるだろうか
今はまだ見慣れないよそよそしい風景も
30年後には誰かの故郷になるかもしれない
あたらしい風景はもうはじまっている

《New Standard Landscape》——「新しい」「標準的な」「風景」と名づけられたかんのの出品作品、それ自体から人の姿を被写体として見出すことはできない。ただ、《New Standard Landscape》に写しとられている家々は、存在感は希薄だが、その背景(というよりも、まさしくその屋内)に「人の様子」を彷彿とさせるものであることは間違いない。例えば、庭先のキャンプ用品によって。あるいは、丁寧に手入れされた植栽によって。または、軒下を飾り立てるデコレーションによって。2011年3月11日の東日本大震災から数年が経った、東北(宮城県仙台市泉区、仙台市若林区、石巻市、福島県双葉郡富岡町)の新興住宅地で2016年以降撮られた写真群は、なるほど「New Standard」としての「ピカピカした新しさ」をそなえながら、確かにそこに人の存在があることを知らせてくれる。そこに見えて(写って)いなくても、「風景」とは「人の様子」であると。

とはいえ、かんのにとっての「風景」は、ただそれとして存在するものとも異なるニュアンスを持っているようだ。すなわち、人の視線や記憶を介在していること。ある風景は、誰もにとって同じ風景なのではない。かんのが、「今はまだ見慣れないよそよそしい風景も／30年後には誰かの故郷になるかもしれない」と言うときの「誰か」。その「誰か」にとっての個別具体的な記憶をとまなう「風景」。ならば風景とは、人の視線・記憶の数だけ、それぞれ複数、無数に存在しえるのではなかったか。いま、私がいる「ここ」。いま、あなたがいる「どこか」。そのけしき、情景。それは私やあなただけの空間ではないが、私やあなただけの風景である。

今回、私はそういう地点から、東北芸術工科大学 開学30周年記念展「ここに新しい風景を、」を始めてみたいと思う。本稿は、まだすべての展示が終わっていない設営中の風景を目にしなが、本展鑑賞のための見取り図として描写される。

東北芸術工科大学開学30年の歴史
1992年4月に開学し、2022年4月に30周年を迎えたことを記念して開催する本展「ここに新しい風景を、」は、本学本館のギャラリースペースTHE WALL(1階)とTHE TOP(7階)の2会場で実施するものだ。THE WALLは、年譜「東北芸術工科大学開学30年の歴史」(制作:企画調査室)と、元・現教職員・関係者(84名)と卒業生による言葉を中心とするグラフィックとインタビュー映像の展示。THE TOPは、卒業生8組(アメフラシ、飯泉祐樹、F/style、かんのさゆり、近藤亜樹、近藤七彩、多田さやか、西澤諭志)とひとつのプロジェクト(東北

画は可能か?)による展示。二部構成で、いずれのアートディレクションも、本学情報デザイン学科卒業の小板橋基希(akaoni)である。

「元・現教職員による言葉があるといいのではないか」と提案したのも小板橋であった。本展は、企画当初は「12,836+(12,836プラス)」という、開学以来2021年度までの卒業生・修了生の人数をタイトルとしてスタートし、途中、ある判断から変更したという経緯を持つ。数字から、幾分かの抒情性をはらんだタイトルへ。当初はTHE TOPのキュレーション上のキーワードであった「新しい風景」、タイトルであった「ここに新しい風景を、」を全体に敷衍する過程で、必要とされたものが「風景」の複数性であったと言えるだろうか。

実際、30年という時間の積層が、年譜に加え、元・現教職員と卒業生による言葉によって際立つ思いがする。それらは、「芸工大で、記憶に残っているイメージ(人・風景・物事)」「芸工大で学ぶ学生に対する言葉」のどちらかを選んでいただく格好で、主に学内の教職員に寄稿を呼びかけたものである(壁面とエレベーター内に掲示しているものは抜粋であり、全員・全文は、壁面手前の台座のグラフィックで読むことができる)。それらは、ある一文は大学の歴史において重要な出来事が語られた記録性の強いものであり、ある一文は非常に個人的ではあるがこの場所で起こった物事や感情が語られているという点で、やはり貴重なアーカイブにほかならない。校友会からの呼びかけによって集められた卒業生からの言葉・写真は、「思い出」にとどまらず、すべからく大学が学生なしには存在できない教育機関であるということも示しているのではない。ぜひご一読いただきたい。

さらに、THE WALLでは、小沢明(元環境デザイン学科教授、第3代学長、本学名誉教授)、上條喬久(元情報デザイン学科教授、大学ロゴ作成、大学名提案)、長澤忠徳(元情報デザイン学科助教授、現武蔵野美術大学学長)、峯田義郎(元美術科彫刻コース教授、本学名誉教授)、畠中美栄子(元大学ストアスタッフ)、原田奈緒美(大学教学課 学生相談員、元校友会事務局)、片岡杏子(本学一期生[洋画コース]、表現の場づくり研究室)、後藤健一郎(本学一期生[映像デザインコース]、現寒河江市議会議員)の各氏のインタビュー映像を制作・展示。いずれの方も大学開学の草創期をご存知であり、2022年の現在からその当時を見つめ直すとき、30年前に立ち上げられた理念と活動があつてこそ、現在の本学があることを実感させられる。出演者の推薦はすべて校友会によるものである。

本学設立に大きく寄与した元理事長である徳山詳直(1930-2014)の熱意あふれる言葉の数々にも触れておきたい。本展では、「大学設立の宣言」(1992年春)、「二十一世紀に向けて 東北芸術工科大学の誓い」(2000年5月)、『藝術立国』(幻冬舎、2012年)の3つのテキストから、特に今回着目したい一節を抜粋・掲示している。「大学設立の宣言」(1992年春)が、「この大学は、悠久の大河最上川をつつんで、蔵王連峰、出羽三山、朝日連峰に囲まれる日本文化の源流、縄文の奥深い土壌の中から生まれた」と、まさしく「風景」の描写から始まる点に注目していただきたい。本学が、山形県と山形市による公設民営の大学として設立しながら、「山形芸術工科大学」ではなく「東北芸術工科大学」と命名されたことは、本学のロゴデザインを行政から依頼された上條喬久からの提案であつたと今回のインタビューにも詳しいが、徳山もまた、「東北」という場所に強い思いを抱いていた。そして、(さまざまな文章に見られるように)「新しい世界調和への展望」「新しい世界観の確立」「新しい文明の原理」の探究を、「新しい世紀」「新しい時代」に、東北芸術工科大学という「新しい大学」で実践しようとしていた。「わが大学の前に道はなし。あるは、歴史の実験のみ」(「大学設立の宣言」1992年春)という言葉から30年。今は次第に整えられてきた道の上で、しかしなお、本学には「歴史の実験」が求められていると言えるだろうか。

卒業生8組とひとつのプロジェクトの展覧会

そう、「新しい風景」という本展のキーワードの着想は、前述の徳山詳直の言葉によるところが大きい。THE WALLのための言葉を募った際、いく人かの教員が本学における「畑」の存在について言及しているが、かつて、「この敷地は全部畑と田んぼだった」(徳山詳直『藝術立国』幻冬舎、2012年)、『藝術立国』には、その土地をいくらで買い取ったという生なましいことも書かれているためご興味のある方はご一読をお勧めしたいが、その「畑と田んぼ」だったところに大学が建設され、そしてその校舎もだんだんと施設が増設されていく(年譜を参照されたい)。THE TOPで展示するのは、その「新しい風景」で学んだ卒業生8組と、ひとつのプロジェクト(チュートリアル)である。1階から7階へエレベーターを上がったのち、時計回りの導線を辿るようにして彼らの作品を紹介したい。

まず来場者を出迎えるのは、多田さやかによる《SHAMBHLA》(2015年)である。大学院の修了制作として制作された本作のタイトル「シャンバラ」とは、理想の仏教国のこと。多田は、「理想郷」をテーマに制作を行なっているのだが、描かれているモチーフには彼女にとって親しみ深い街や自然の風景が入り込

んでいる。それは、多田にとっての「理想郷」が、遙か遠くで見出されるものではなく、作家のいる今・ここ、あるいは、かつていた・どこかと地続きであることを意味しているのかもしれない。《SHAMBHLA》の上部へと飛び立つようにして展示されているのは、本展のための新作《Wandervogel》(2022年)。大学院修了後は実家のある山形を離れ、東京で暮らし、活動する多田が、この7年間の間に見た風景が、数十羽の鳥となって飛び交っている。

近藤亜樹は、学生時代を山形で過ごし、その後東京から小豆島と拠点を移したのち、2020年、ふたたび山形に居を移して活動しているアーティストである。山形の県花・紅花が主なモチーフの《ただいま山形》(2021年)は、のびやかな筆致とあざやかな色彩によって、みずみずしい生命力の発露を伝える作品だ。近藤は、本作を発表した2021年の山形美術館の個展「近藤亜樹一星、光る」に際して、このようなステイトメントを寄せている。「わたしたちは生きている生まれ落ちたこの星で カタチはみんな違うけど 光と影をいきている たったひとつの美しい命 禱り、踊り、歌い、笑え 生きる命よ蘇れ 今光るこの星に」(『近藤亜樹一星、光る』図録、山形美術館、2021年、p.4)。心の故郷に思いを寄せた作品「ただいま山形」をご鑑賞いただきたい。

写真家・映像作家として活動する西澤諭志は、本展会場で学生時代の卒業制作《絶景》シリーズ(2007年～2010年)を新たにプリントし、近作とともに展示を行いつつ、さらにイベントとして映画『百光』(2013年)の上映会(2022年9月18日、本館201教室)を行う。被写体を本学の各所に見出しながら、モニュメンタル然とした、何か特別のものであるかのような撮影が行われている《絶景》シリーズと、まさしくモニュメンタルな場所・施設を被写体とした《ウポポイ(民族共生象徴空間)／北海道百年記念塔》(2020年)、《東日本大震災・原子力災害伝承館／東京オリンピック・パラリンピック選手村》(2021年)、《福島県双葉郡富岡町》(2018年)、《福島県双葉郡双葉町／東京都港区 高輪ゲートウェイ駅》(2021年)。そして、自身が住む部屋を1年間にわたり撮影し、「布団」「台所」「客人」「窓」の四章構成で制作した映画『百光』。これらの作品群を通して見えてくるのは、公私において風景が形作られる、大ききわめて甚大な幅のある力学のようなものだろうか。

近藤七彩による作品群は、もともととは何か具体的な機能を持つものが、切り分けられ、組み合わされることで一点一点が形作られている。それらは、建具、掛け軸の風鎮、仏具、木彫(熊)など、(日本の)家の内部にある(であろう)ものたちで統一されているようで、それらのディテールから自身や親しい人の家の光景を思い起こされる人もいるかもしれない。近藤はそれらをリサイクルショップなども利用して手に入れるのだという。誰かの日常風景を形作っていたが、今は無用となってしまったものを、近藤は寸断し、別々のもの同士を接続し直すことで、新たなイメージを立ち上げる。それらは、ただ組み合わせの妙ということではない。《無用建具#1》《無用建具#2》《無用建具改#1》の形態感覚で見られるように、近藤は、既存の造形物の切り取り方にその特異性を見出せるように私には思われる。ある風景・光景を、近藤は独特の視点でトリミングする視力をもっているのではないか。

4人組で山形県長井市を拠点に活動しているアメフラシは、近藤七彩とは異なるやり方で、本展においてきわめてストレートにある風景を切り取ってきた。《切り取る/Cut out》(2022年)は、アメフラシが市民参加もまじえりノベーションした元印刷工場であり、現在は市民アトリエである彼らの拠点「Kosyau」(山形県長井市)2階の一区画を、まさしく「切り取る」ようにしてTHE TOPまで「移築」(?)した作品である。現在アメフラシは、2階をスタジオとして改修するためこれら壁面を撤去しているのだという。そのため、素材としては「廃材」となっているが、本作もまた、かつてはある機能をもった空間だった。本展では、その移設された空間を用いてアメフラシの活動が紹介されている。展示のための什器であり、それ自体作品であるという《切り取る/Cut out》が突きつけるのは、ある風景を構成するものが無用であるか有用であるかを越えた、そのものの自体の存在感である。

飯泉祐樹の作品《木石を刻むことはできず、ただ夢を塑す》(2018年～2022年)は、これまで飯泉が制作してきた作品に、さらに作品・木材を加え、空間全体を用いて一点の作品として構成することで形作られた。2日間の設営現場での飯泉の手つきを見ていると、彼は言うならば感覚的に、作品と木材の組み合わせ、空間における配置を決めているように見受けられた。そのさまは、人類学者のレヴィ＝ストロースが『野生の思考』(1962年)で提唱したブリコラージュ(bricolage)の概念を想起させる。すなわち、ありあわせのものを用いて自分の手でものを作ること。「ありあわせ」というと聞こえが悪いかもしれないが、そこにこそ創造性が宿る。彫刻家の戸谷成雄やコンスタンティン・ブランクーシを思わせる造形感覚も一部垣間見せながら、飯泉による本作は全体としてはまるで違う風景を作り上げた。作品の大枠だけではなく、例えば空間上部から吊り下げられているもの(小さな、透明感のある)や、ドローイングなどのディテールにも目を凝らしていただきたい。

2009年11月、本学教員の三瀬夏之介と鴻崎正武(2022年4月より女子美術大学)により、学生とともに東北における美術の可能性を考えるプロジェクト(本学では「チュートリアル」と呼ぶ教員と学生の課外活動である)としてスタートした「東北画は可能か?」からは、「12号」と呼称される作品群30点を展示した。これらは、P12号(長辺606×短辺455mm)のパネルを基本フォーマットとして(一部例外あり)、画材・モチーフは自由、ただし「東北」に寄り添って制作を行うことが課された個人制作の作品である。活動13年目となる現在では合計150点を越え、本展では、必ずしも教員・学生を問わず活動に賛同し制作された作品群も含め、風景あるいは風景を彷彿とさせるイメージが描かれた作品を私がピックアップしている。「誰か」にとっての東北のイメージが照射するのは、「あなた」にとっての東北のイメージだろうか?

写真家・かんのさゆりによる《New Standard Landscape》は、本展では、一見して「どこ」とわかりにくいものと、「あそこであるだろうか」とわかりやすいかもしれないものが、壁面を隔てながらも隣り合うようにして展示されている。どちらも同じようにわからないという人もいようだろう。作品リストを見ていただければ、どこで撮られたものか撮影地が記載されている。例えば、福島県双葉郡富岡町は、福島第一原子力発電所事故の影響により長く避難指示区域である(ただし、2017年4月1日、北東部の帰還困難区域を除き避難指示区域から解除)。東日本大震災そして福島第一原子力発電所事故により、変わらざるをえなかった風景。「人の様子」が長く認められない場所が、展覧会としては、個人の新築の住宅と隣り合ったとき、いったいどのような感触を与えるのかということ、私は、誰か——あなたと話してみたいと思う。

ところで、風景の最小単位というものはあるだろうか? 私はそれを居住する家に見いだせるのではないかと考えた。五十嵐恵美と星野若菜によるF/styleの仕事から生み出されるプロダクトは、とかく人の生活——家と結びついている。例えば、ふたりが学生時代に手がけ、F/styleの代表作として現在も作られている犬が象られているマット(《HOUSE》穂積繊維工業)。それは、経年変化が基本的には回避され、制作当初のままの状態で保存・展示されることが望まれるいわば美術作品とは違い、人の生活の中で使われることが前提である。根本の意図が違うのだ。本展では、数々のプロダクトがどのような人と空間の中で用いられているのかという点に私が関心を引かれ、プロダクトそのものと、プロダクトが含まれる光景の写真(すべて、五十嵐がマニュアルで撮影)を二本柱に展示を構成いただいた。それらは、私やあなたが、日々の生活の起点となる風景——日常を、もっと深く、愛おしく、丁寧に、面白く、見つめることにつながるかもしれない。

こうして、多田さやかによる「理想郷」——そこには日常も含まれている——から、F/styleによる「誰か」の生活の風景をもって、本展は締めくくられる。

むすびに

「風景」には「風」が含まれている。「風」とは、「①空気の流れ。気流。特に、肌で感じるもの」「②なりゆき。形勢。風向き」「③ならわし。風習。しきたり。流儀」「④(接尾辞的に)そのようなそぶり。様子」(いずれも、新村出・編『大辞苑』第七版、2019年5月、岩波書店)のこと。そして、「新しい」とは、「①初めてである」「②できたり起こったりして間がない。使い古されていない」「③生き生きとしている。(肉・野菜などが)新鮮である」「④今までにないものや状態である。斬新である」「⑤改めた後のものである」(前掲書)とあって、すなわち「新しい」「風景」とは、どこか固定化されない、移り変わりを多分に含んだ景色のありようのことだと、本展で私は考える。

その上で、「ここに新しい風景を、」と口にしてみる。読点の先には、さらに言葉が続くかもしれないし、続かないかもしれない。本展では、その可能性だけを示している。なぜならそこから先は、私でありあなたの問題であると思うからだ。本展の起点には、東北芸術工科大学という1992年4月に山形県山形市に開学した「新しい風景」の存在がある。けれども、年譜をたどればいつそう明らかのように、その「風景」もまた、30年間で変わり続けている。「新しさ」も、何をそれと認めるのか、人によって意見の差異が現れるだろう。

ここで改めて、徳山詳直の述べた「新しい世界調和」「新しい世界観」「新しい文明」「新しい世紀」「新しい時代」そして「新しい大学」という言葉を、彼の考えたそれらではなく、自分ごととしてどういうものかと考えてみてもいいかもしれない。そして、「新しい風景」についても。

「ここに新しい風景を、」

この余白を含んだ抽象的で未完成な一文のゆくえを、ご来場されたあなたの認識や知覚をもってして考えていただきたいと思っている。